

第12回 第2章 武家社会の形成と生活文化のめばえ

執権による政治

執筆・講師
本郷和人

学習のねらい

日本の政治史は、たとえば中国の政治史に比べて穏やかである。たとえば左遷されて恨みをのんで亡くなったとはいえ、菅原道真は九州の長官で十分な高官だった。例外が鎌倉幕府の抗争劇である。ここでは失脚は死につながった。こうした厳しい試練を乗り越えて実権を握ったのが、源頼朝の妻・政子の実家、北条氏であった。

北条氏の台頭

もともと北条氏は伊豆国の国衙こくが（現在の県庁）に出仕するそれほど偉くない役人であり、武士であった。失敗したら滅びるしかない、という源頼朝の挙兵に際して北条時政ときまさが用意できた兵士はたった50名ほど。その規模の小ささがわかるだろう。

はじめ頼朝は伊豆を代表する伊東氏の娘と恋に落ちた。だが、娘の父は平家にとっての危険人物である頼朝を婿として認めなかった。これに対して北条時政は娘の政子と頼朝の結婚を認め、頼朝を支援した。北条氏の命運を頼朝に賭けたのである。

賭けは成功し、頼朝は鎌倉に幕府を開いた。ここで北条氏は頼朝の妻の実家として重んじられたが、北条氏がさらなる飛躍を見せるのは頼朝の没後であった。時政と義時の父子は、コントロールできない2代将軍よりのえの頼家を排除するとともに、梶原かじわら、比企ひき、畠山はたけやま、和田わだなどの有力御家人を次々と滅ぼして、勢力を拡大していったのである。

承久の乱

北条氏は操りやすい将軍として、3代の実朝さねともを立てた。ところが実朝に注目し、彼を通じて幕府を動かそうとする人物が現れた。それが京都で院政をしいていた後鳥羽上皇である。後鳥羽上皇は京都から実朝の妻や家庭教師を派遣した。和歌の指導も行った。官位も猛烈なスピードで昇進させ、ついには右大臣にまでなった。実朝が上皇の御恩に感激して家来として忠実に行動すれば、幕府は朝廷の影響力を強く受けざるを得なくなる。

こうした状況の中で、1219年、実朝が暗殺された。犯人は2代将軍頼朝の子・公暁きぎょうであったが、彼の背後に誰がいたのかは明らかではない。ただし、京都にばかり目を向ける実朝がいなくなるのは、関東の御家人にとっておそらく好都合だった。

1221年、後鳥羽上皇は鎌倉幕府の討伐を命令した。幕府の御家人は源頼朝の御恩を強調する政子の演説を受けて、朝廷軍を打ち破った。上皇は捕縛されて、隠岐に流された。これが承久の乱である。

執権政治の確立

承久の乱に勝利したことにより、北条氏の覇権は強固なものになった。将軍には京都から迎えられた摂関家の貴公子が据えられた（4代の頼経、5代の頼嗣）が、彼らには実権はなく、政治は北条政子や、将軍を支える執権の地位についた北条義時が行った。

やがて政子と義時が亡くなると、京都で六波羅探題を務めていた北条泰時（義時の子）が鎌倉に帰り、執権となった。泰時は自分の補佐役として連署を置き（義時の弟である時房がこれに任じた）、さらに十名ほどの評定衆（幕府の文官と有力御家人が任命された）を置いて、合議を基本として政治を行った。これを北条氏の「執権政治」と呼ぶ。

承久の乱に勝利したため、幕府は3,000か所にのぼる荘園を獲得し、御家人を配置した。このことにより、幕府の勢力は東国のみならず、西国にも強く浸透するようになった。泰時は1232年に武士初の法である御成敗式目（貞永式目）を定め、法による支配を推進した。

